

レーニンのイギリス労働運動論 (四)

——第一次大戦と社会排外主義——

富 沢 賢 治

- 一 レーニンにおけるイギリス労働運動論の位置
- 二 マルクス、エンゲルスのイギリス労働運動論のレーニンによる継承(以上、六三卷三号)
- 三 時期区分
- 四 世紀転換期(以上、六三卷五号)
- 五 一九一〇—一九一四年(六四卷一号)
- 六 一九一四年八月—一九一五年(本号)

六 一九一四年八月—一九一五年

すでに前章でも述べたように、大戦開始後のレーニンは、「ハインドマンのグループ(イギリスの社会主義者

——『イギリス社会党』が、労働組合の半ば自由主義的な指導者の大多数と同様に、完全に排外主義へ転落してしまった⁽¹⁾」という事実を指摘し、戦争とともに日和見主義が社会排外主義に形態変化した点に注意をむけてい⁽¹⁾る。社会排外主義の潮流は、戦争の進行とともに、交戦諸国の社会主義者のなかでますます強大なものとなっていったが、この社会排外主義の本質を暴露し、これを批判することが、大戦開始後のレーニンの主要な任務となった。以下、本章では、まずレーニンの社会排外主義批判の時代的背景について述べ、つぎに彼の社会排外主義批判を、一、大戦の性格、二、社会排外主義の本質、三、戦時下における社会主義者の責務という順序で、考察す

る。

1 時代の背景

一九一四年八月に始まった第一次世界大戦によって第二インタナショナルの指導者たちは階級と民族という社会主義の根本問題にあらためて直面させられることになった。この困難な問題に直面して、彼らの多くは、第二インタナショナルの諸大会で採択された戦争反対の決議を無視して、自国の軍事公債に賛成投票し、戦争を弁護し、内閣に入る、などの行為によって、自国の政府を支持する立場にうつっていった。それは、レーニンの目には、「社会主義を民族主義とすりかえよう」とする試みと映じた。各国の社会主義者が、戦争という事態に直面して、つぎつぎと社会排外主義者に転落していく事実をみて、レーニンは、「社会主義者にとってもつとも苦痛なことは、戦争の災禍ではなく……こんなにちの社会主義の指導者の裏切りという災禍であり、こんなにちのインタナショナルの崩壊という災禍である」⁽³⁾、あるいはまた、「現在の危機のもとで、もつとも苦痛なことは、ブルジョワ民族主義、排外主義がヨーロッパの社会主義の公認の代表者の大多数にたいして勝利したことである」⁽⁴⁾とい

う悲痛な言葉を発している。こうして労働者階級の国際連帯の組織は、戦争に直面して、もろくも崩壊し、民族的なきずなは階級の国際連帯よりも強大であるように思われた。第二インタナショナルの組織としての崩壊にもかかわらず、しかもなお、そのイデオロギーとしての日和見主義は、社会排外主義として再生強化されることとなった。この社会排外主義を批判することは、レーニンにとって、日和見主義批判の継続であると同時に、階級と民族の問題を社会主義理論としてどのように明確化していくかという課題の遂行でもあった。

開戦直後の九月にスイスのベルンに移住したレーニンは、ただちにベルンのポリシェヴィキ・グループの会議をひらき、戦争について報告をした。この会議で採択された彼のテーゼ「ヨーロッパ戦争における革命的社会主义主義派の任務」は、翌一〇月に彼が執筆したロシア社会民主労働党中央委員会の宣言「戦争とロシア社会民主党」の基礎をなし、さらには翌年九月に開戦後初めてひらかれた国際社会主義者会議のために彼が執筆した「ツインメルヴァルト左派の決議草案」の基礎ともなった。一九一四年に書かれたこのほか数多くの文献のなかで、

レーニン、大戦を帝国主義戦争と規定し、この帝国主義戦争を内乱に転化せよというスローガンを提起し、また、破産した第二インタナショナルのかわりに、日和見主義を排除した新しいインタナショナルを結成するように、よびかけた。数多くの論文で排外主義を鋭く批判したレーニンは、同時にまた、ボリシェヴィキが「反愛國的」で祖国愛をもたないという非難にたいしては、「大ロシア人の民族的誇りについて」(一九一四年一月)を發表し、そこで、労働者が熱烈な祖国愛をもつこと、そしてその愛国心を国際主義とどう結合すべきかを、明らかにした。

一九一五年二月、ロンドンで協商諸国(イギリス、フランス、ベルギー、ロシア)の社会主義者の会議が召集されたとき、レーニンは、ロシア社会民主労働党中央委員会の声明草案を準備した。この声明のなかには、社会主義者がブルジョワ政府からただちにひきあげ、「国内平和」に反対し、軍事公債に反対せよという要求がもりこまれていた。この声明はリトビノフが会議で読みあげるように委任されていたが、数多くの社会排外主義者からなるこの会議の議長は、この声明をおわりまで読むこ

とを許さなかった。リトビノフは、抗議のしるしに議場を去り、レーニンを中核とするロシアのボリシェヴィキが社会排外主義と対決するものであることをはっきりと表明した。

一九一五年の夏ごろには、各国の大衆のあいだに戦争にたいする不満が増大し、左派社会主義者もいっそう大胆に行動するようになった。国際労働運動の発展にとまない、左派国際主義者の会議を召集する必要が熟してきた。一九一五年九月五―八日にツインメルヴァルトでひらかれた国際社会主義者会議は、開戦後はじめてひらかれた国際主義者の会議であった。会議では、レーニンを先頭とする革命的国際主義者と多数派のカウツキー派とのあいだに論争が展開された。レーニンは、この会議で、左翼グループを組織した。大戦開始から一九一五年にいたるレーニンの全思想は、この会議のために彼が準備した「ツインメルヴァルト左派の決議草案」(全・XXI・三五五―七ページ)に、もっとも端的なかたちで集約的に表現されている。「草案」は三つの部分からなる。第一の部分は第一次世界大戦の本質規定であり、第二の部分は社会排外主義批判であり、第三の部分は戦時下にお

ける社会主義者の責務にかんするものである。以下、この「草案」の考察を基礎にして、とくに社会排外主義批判に焦点をあわせつつ、開戦後のレーニンの思想を究明していくことにしよう。(なお、付言すれば、レーニンの社会排外主義批判は、かならずしもすべて直接に彼のイギリス労働運動論に関連するものではないが、しかし、それは、彼のイギリス日和見主義批判の一系論であり、また彼のイギリス共産党創設論の不可欠の前提でもあるという意味で、われわれは本章で彼の社会排外主義批判を——彼のイギリス労働運動論の究明という特殊な視点からではあるが——一般的に考察対象とする。)

2 第一次世界大戦の性格

「ツインメルヴァルト左派の決議草案」は、つぎのように大戦の性格を規定している。「現在の戦争は、帝国主義によって生みだされたものである。資本主義はこの最高の段階に到達した。社会の生産力と資本の規模は、個々の民族国家の狭い枠をこえて成長した。ここからして、他民族を奴隷化し、原料産地および資本輸出地としての植民地を略取しようとする諸大国の志向が生まれて

いる。全世界は一つの経済的有機体に融合しており、世界は一にぎりの大国のあいだに分割されている。……現在の戦争は、資本主義の崩壊をおくらせることができるような特権と独占とをめざす、資本家たちの戦争である。」「現在の戦争は、ブルジョワジーが進歩的なものから反動的なものとなった……歴史的时代によって生みだされたものである。交戦諸列強の両グループのどちらかがわからなくても、この戦争は奴隷制を維持し強化するための、植民地の再分割のための、他民族を抑圧する『権利』のための、大国の資本の特権と独占のための、さまざまな国の労働者を分裂させ彼らを反動的に弾圧することによって賃金奴隷制を永久化するための、奴隷所有者たちの戦争である。」

「草案」における右の大戦の規定をさらに端的に表現すれば、第一次大戦は、帝国主義が生みだした「奴隷所有者たちの戦争」である、といえる。「草案」におけるこの見解を、一九一四年八月—一九一五年にレーニンが執筆した他の諸文献にもとづき、さらに敷衍しておく。

レーニンによれば、戦争は資本主義体制が必然的に生

みだすものである。「戦争は、私的所有の基礎に矛盾するものではなく、そういう基礎の直接の、避けられない発展である。資本主義のもとでは、個々の経営や個々の国家の経済的發展が均等に成長するということはありえない。資本主義のもとでは、破壊された均衡をときどき回復する手段は、産業における恐慌と政治における戦争よりほかにはありえない。」この意味で、戦争は、平和と同じ程度に当然な、資本主義的生活形態であり、暴力的手段による日常政治の継続にすぎないのである。とくに帝国主義段階では戦争はさげられない。なぜならば、帝国主義は、レーニンによれば、資本が民族国家の枠を乗り越えて成長したことを意味し、新しい歴史的基礎のうえて民族的抑圧が拡大・激化したことを意味するからである。彼は、『社会主義と戦争』のなかで次ページにかかげる表を作成し、一八七六年と一九一四年とを比較して、この間に列強による世界分割がいかに進展したかを示し、この表をもとに、つぎのような結論を析出している。「一七八九—一八七一年にはおおむね自由のため他国民の先頭に立ってたたかった諸国民が、いまや、一八七六年以後には、高度に發展し、『過度に熟した』資

本主義を基盤として、地球上の人口と民族との大多数にたいする抑圧者、奴隸主となってしまった。……植民地が砲火と銃剣によって征服されたこと、植民地ではその住民はむごい取扱いをうけていること、無数の方法(資本の輸出、利権その他、商品販売のさいのごまかし、『支配』民族の権力機関への屈従、等々)で搾取されていることは、だれでも知っている。」レーニンがこの表のなかであげている列強のうちで第一次大戦にかんしてさしあたりとくに重視されている国が、イギリス、ロシア、フランス、ドイツの四国であることは、『社会主義と戦争』につづいて彼が書いた論文「ヨーロッパ合衆国のスローガンについて」(一九一五年八月)において、明らかである。彼は、そこで、帝国主義諸国による他民族支配の組織について、つぎのように述べている。帝国主義段階においては、「資本は、国際的となり、独占的となった。世界は、一にぎりの大国のあいだに、すなわち、諸民族を大がかりに略奪し抑圧することに大成功をおさめている強国のあいだに、分配されてしまった。ヨーロッパの四大国、すなわちイギリス、フランス、ロシア、ドイツは……地球(極地をのぞいて……)のほぼ半

(43) レーニンのイギリス労働運動論(四)

奴隷所有者的「大国」による世界の分割 (単位 面積100万平方キロメートル
人口100万人)

「大」国名	植 民 地				本 国		合 計	
	1876年		1914年		1914年			
	面積	人口	面積	人口	面積	人口	面積	人口
イギリス	22.5	251.9	33.5	393.5	0.3	46.5	33.8	440.0
ロシア	17.0	15.9	17.4	33.2	5.4	136.2	22.8	169.4
フランス	0.9	6.0	10.6	55.5	0.5	39.6	11.1	95.1
ドイツ	—	—	2.9	12.3	0.5	64.9	3.4	77.2
日本	—	—	0.3	19.2	0.4	53.0	0.7	72.2
アメリカ合衆国	—	—	0.3	9.7	9.4	97.0	9.7	106.7
六「大」国計	40.4	273.8	65.0	523.4	16.5	437.2	81.5	960.6
「大」国でない諸国家(ベルギー、オランダ、その他)に属する植民地			9.9	45.3			9.9	45.3
「半植民地」三国(トルコ・中国、ベルシア)							14.5	361.2
総計							105.9	1,367.1
その他の国家と国							28.0	289.9
全世界(極地をのぞく)							133.9	1,657.0

分を占める植民地をもっている。……さらに、イギリス、フランス、ドイツは、七〇〇億ルーブリをくだらない資本を国外に投資している。このまんざらでもない金額からの『正当』な小収入—を取得するために、陸海軍をそなえ、『億万長者氏』のご子息や兄弟を、総督、領事、大使、あらゆる種類の役人、僧侶その他の吸血鬼として、植民地と半植民地に『配置する』、政府と呼ばれる百万長者たちの全国委員会がご用をつとめている。資本主義が最高の発展をとげた時代には一にぎりの大国による約一〇億の地球人口の略奪はこのように組織されている。」「帝国主義戦争の不可避免性にかんする右のような見解を基礎に

して、レーニンは、第一次大戦の直接的要因として、「軍備の増大、市場獲得闘争の極度の激化、もっともおくれた東ヨーロッパの諸君主国の王朝的利益」⁽⁸⁾をあげ、さらに、この戦争の性格を規定して、それが、第一に「植民地の奴隸制をつよめようとする戦争」であり、第二に「国内での他民族にたいする圧制をつよめるための戦争」であり、第三に「賃金奴隸制を強化し長びかせるための戦争」であるという意味で、三重の意味での「奴隸所有者たちの戦争」⁽⁹⁾である、と述べたのである。

3 社会排外主義批判

レーニンによれば、帝国主義による諸民族抑圧という経済的・政治的過程は、その戦時下におけるイデオロギイ的反映として必然的に社会排外主義を生みださざるをえない。だから彼は、帝国主義を規定して、「帝国主義とは、一にぎりの大国による世界の諸民族の抑圧が増進することである。それは、民族抑圧をひろげ強固にするための大国間の戦争の時代である。それは、偽善的な社会愛国主義者——すなわち、『民族の自由』、『民族自決権』、『祖国防衛』という口実のもとに、大国による世界の

大多数の民族の抑圧を正当化し擁護する人々——が、人民大衆を欺く時代である」と述べたのである。こうして開戦後のレーニンは、帝国主義にたいするイデオロギー戦線での主要攻撃目標をこの社会排外主義におき、「ロンドン会議にかんして」(一九一五年)のなかで、社会排外主義を「こんにちの社会主義のもっとも主要な悪」ときめつけ、「すべての努力は、この悪との闘争に……そなえて結集しなければならない」と主張し、社会排外主義にたいして宣戦布告をしたのである。⁽¹¹⁾以下において、レーニンの社会排外主義批判の論旨を究明することにしよう。

「ツインメルヴァルト左派の決議草案」は社会排外主義をつぎのように批判している。大戦がブルジョワジーの戦争、「奴隸所有者たちの戦争」、であるからには、「両交戦グループのどちらのがわからなくても、『祖国擁護』をうんぬんするのは、人民にたいするブルジョワジーの欺瞞である。」「この戦争で『祖国擁護』のスピーカーがもつ真の意義は、『自』国のブルジョワジーが他民族を抑圧する『権利』を擁護することであり、国権的自由主義的労働者政治であり、プロレタリアと被搾取者と

の大衆に対抗して特権的労働者のごくわずかな部分と『自』国のブルジョワジーとが同盟することである。このような政策をおこなう社会主義者は、実際には、排外主義者、社会排外主義者である。軍事公債への賛成投票や、入閣や、国内平和、等々の政策は、社会主義にたいする裏切りである。過ぎさった『平和な』時代の諸条件によってそだてられた日和見主義は、いまや社会主義と完全の手を切るまでに成熟し、プロレタリアートの解放運動の直接の敵となった。労働者階級は、おおっぴらな日和見主義および社会排外主義(フランス、ドイツ、オーストリアの社会民主諸党の大部分、イギリスのハインドマン、フェビアン派および労働組合主義者：等々)とも、またマルクス主義の陣地を排外主義者にあけわたしたいわゆる『中央派』とも、断固として闘争することなしには、自分の世界的目的を達成することができない。」

ここにみられるように、レーニンは、「祖国擁護」を主張する社会主義者を社会排外主義者と規定し、彼らが日和見主義者と同質であることを明らかにし、その主張者として西欧の社会民主諸党やイギリスのハインドマン、フェビアン派および労働組合主義者などをあげている。

そこで、以下において、まず、社会排外主義と日和見主義との関連についてのレーニンの見解を明らかにし、つぎに、社会排外主義の主要な諸理論にたいする彼の批判を考察し、最後に、社会排外主義批判におけるイギリスの特殊性を究明することにしよう。

A、社会排外主義と日和見主義。レーニンは、「第二インタナショナルの崩壊」において、社会排外主義の問題点を整理して、(一)社会排外主義はどこから出てきたのか？ (二)なにがそれに力をあたえたのか？ (三)どのようなにしてそれとたたかうべきか？ という三つの論点を提起している。⁽¹²⁾以下、これらの問題のそれぞれについて彼がどのように検討しているかを、一九一四年八月—一九一五年の諸文献に依拠しながら、考察することにしよう。

第一問、社会排外主義はどこから出てきたのか？ レーニンは社会排外主義を規定して、「社会排外主義とは、現在の帝国主義戦争で祖国擁護の思想をみとめ、この戦争で社会主義者が『自』国のブルジョワジーおよび政府と同盟することを正当化し、『自国』のブルジョワジーにたいするプロレタリア的革命的行動を宣伝し支持す

るのを拒絶する、等々することである⁽¹³⁾とし、このように規定された社会排外主義が日和見主義の潮流から発生したものであることを論証する。彼は、その論拠として、第一に、両者の経済的基礎が同一であること、第二に、両者の「思想的・政治的内容」が同一であること、そして第三に、「社会主義者を日和見主義的潮流と革命的潮流とに分ける、第二インターナショナルの時代……に特有な古い区分が、排外主義者と国際主義者とに分ける新しい区分に、だいたい対応している」ことをあげる⁽¹⁴⁾。以下、これら三つの論拠のそれぞれについてさらに詳論しよう。

社会排外主義の経済的基礎。レーニンによれば、「日和見主義と社会排外主義との経済的基礎は同一のものである。すなわち、労働者と小ブルジョワジーのごく少数の特権層の利益がそれであって、彼らは自分たちの特権的地位をまもり、また『自』国のブルジョワジーが、他民族を略奪することや、その大国としての有利な地位を利用することによって、手に入れた利潤のおこぼれをもらう自分たちの『権利』をまもっているのである⁽¹⁵⁾。」このようにレーニンによれば、日和見主義と社会排外主義の経済的基礎はともに「労働者と小ブルジョワジーのごく少

数の特権層」の利益にもとめられるのであるが、この特権層の具体例としては、「植民地の搾取からの所得、また世界市場での『祖国』の特権的地位からの所得の一部のおこぼれをもらった労働貴族」、「特権的な職員」、「労働運動内の官僚」あるいは「合法的な労働団体の役員」のほかに、「合法的な大衆運動のもとでよろしく安穩にやっているインテリゲンツィア」、「ジャーナリスト」、「官吏」、「国会議員」などが、あげられる⁽¹⁶⁾。この例示によって明らかごとく、日和見主義・社会排外主義の階級的基盤は、ただだんに「最高給をもらっている労働者の若干の層」だけにとめられるべきではなく、小ブルジョワジーをも含めたより広範な諸階層にもとめられなければならない。レーニンはこれらの階層のすべてを含めて「労働貴族」という概念を用いることがあるが、そのように広義に用いられた「労働貴族」概念は、「最高級をもらっている労働者の若干の層」という狭義の「労働貴族」概念と明確に区別されて理解されねばならない。では、右に例示された社会層を基盤とする日和見主義的傾向はどのような歴史的条件的もとで生みだされてきたのであろうか。レーニンはつぎのように説明する。

一八七〇年代以降の大国家による植民地の領有と拡張は、経済的には、ブルジョワジーにとっては、「一定の超過利潤と特別の特権との総和」を意味し、わずかな小ブルジョワ、高級職員、労働運動の役員等にとっては、この利得の残りものを享有する可能性を意味した。このような現象は一九世紀にあってはイギリスだけに例外的にみうけられたにすぎないが、帝国主義段階になると、ヨーロッパのすべての大資本主義国に共通の現象となった。植民地領有時代の一特徴である改良主義は、特定の社会層を基盤として、共通の経済的・社会的・政治的利害でブルジョワジーとむすびつけられている一つのまとまった日和見主義的傾向をつくりだした。⁽¹⁷⁾

ここにみられる説明は、すでに前稿までに考察してきた日和見主義の経済的基盤の説明と、その論理においては、なんら異なるものではない。ただ、日和見主義の階級的基盤として「労働貴族」のほかに「小ブルジョワジー」が付加されることによって、社会層の具体的内容が豊富化されるとともに、日和見主義の経済的要因として「超過利潤」のほかに大國ブルジョワジーの「特権」が付加され、その「総和」が問題とされることによって、

日和見主義の経済的要因の内容も豊富化されていることがとくに注意されねばならないだけである。レーニンは、戦時における社会排外主義の経済的要因についても、右と同じ論理で、こう説明する。「大國はみな、世界の強奪と分割のため、市場のため、民族を隷属させるために戦争をやっている。それは、ブルジョワジーに利潤の増大をもたらすであろう。それは、労働官僚と労働貴族という小さな層に、つぎに、労働運動に『くわわった』小ブルジョワジー（インテリゲンツィアその他）に、この利潤のおこぼれを約束している。」⁽¹⁸⁾ここにみられるように、労働官僚・労働貴族・小ブル労働運動家を生みだす経済の論理は、戦時においても平和時と基本的には変わらない。すでに述べたように、レーニンにおいては、戦争は日常政治の延長線上に位置づけられる。戦争は国際的経済競争の一政治形態である。それゆえ、右の引用文中の「戦争」という言葉の代りに「競争」という言葉を入れかえれば、平和時における労働貴族発生論ともなりうるのである。

「社会排外主義と日和見主義との経済的基礎は同じである。労働運動のとりたりにない『上層』が、プロレタ

リアートの大衆にたいして、『自』国のブルジョワジーとむすんでいる同盟がそれである⁽¹⁹⁾』というレーニンの結論は、以上において考察した内容をもつものとして理解されるのであるが、では、社会排外主義と日和見主義とは、どう異なるのであろうか。この間にたいしてレーニンは端的に、『社会排外主義は完成された日和見主義である』⁽²⁰⁾と答える。「完成された日和見主義」とは、広義の労働貴族とブルジョワジーの同盟が完成したことを意味する。すなわち戦争は、秘密の、自発的な同盟を、明確な、強制的なものに転化する。レーニンによれば、帝国主義の発展とともに、「国会議員、ジャーナリスト、労働運動の役員、特権的な職員、プロレタリアートの若干の層からなるまとまった社会層」が成熟したが、第一次大戦の勃発とともに、「この社会層は自国のブルジョワジーと癒着してしまい、そしてこのブルジョワジーは、この社会層を評価し、『順応させ』ることが、完全にできた」⁽²¹⁾のである。

こうしてレーニンにおいては、社会排外主義は日和見主義の本質的継続であり形態的完成であるとして把握される。だから彼は、戦争による日和見主義の社会排外主

義への転形について、結論的にこう述べる。「日和見主義は、特権的な労働者層の比較的平和で文化的な生存が彼らを『ブルジョワ化』し、彼らに自国の資本の利潤のおこぼれをあたえ……大衆の災厄や苦難や革命的気分から彼らを分離させた、資本主義発展の一時代の特殊性によって、数十年のあいだに生みだされたものである。帝国主義戦争は、このような事態の継続であり完成である。なぜなら、これは、大国民族の特権のため……の戦争だからである。小市民の『上層』または労働者階級の貴族(および官僚)としての自分の特権的地位を擁護し強化すること、——これが、小ブルジョワ的日和見主義的希望とそれにふさわしい戦術との、戦時における自然の継続であり、これが、こんにちの社会帝国主義(この場合、社会排外主義と同義——富沢)の経済的基礎なのである」⁽²²⁾。

つぎに社会排外主義の「思想的・政治的内容」について検討しよう。レーニンによれば、「日和見主義と社会排外主義との思想的・政治的内容は同一のものである。すなわち、階級闘争のかわりに階級協力、革命的闘争手段の放棄、『自国』政府の困難を革命のために利用する

かわりに、困難な状態にある『自国』政府への援助、これがそうである。⁽²³⁾この場合レーニンがなぜ「思想的に政治的」という二つの形容詞を同時に用いたのかは、かならずしも明確ではないが、本項では社会排外主義の本質を明らかにするために、社会排外主義の経済的内容を考察した前項にひきつづき、以下、まず政治的内容を考察し、つぎに思想的内容を考察するという順序に従うことにしよう。

まず政治的内容についてであるが、レーニンは、日和見主義の政治的内容を、「日和見主義は労働運動内でのブルジョワ的政治を表現するものである⁽²⁴⁾」、あるいは、「日和見主義は自由主義的な労働者政治活動である⁽²⁵⁾」と表現する。彼によれば、数十年にわたる資本主義の「平和な」時代は、あらゆる国に日和見主義を生みだし、議会、労働組合、言論機関などの指導者層をその陣営にひきいれ、また全ブルジョワジーは、革命的プロレタリアートを堕落させ、無力にするために、無数の方法で日和見主義を支持してきたのであるが、一九世紀末の客観的諸条件は、このような日和見主義をとくにつよめ、ブルジョワ的合法性の利用ということをその合法性への隷従

に変え、労働者党の隊列のなかに多数の小ブルジョワ的「同伴者」をひきいれた。さらに二〇世紀になると、労働運動を外部からの強制力でおしつぶすことはもはやできないということが、全ブルジョワジーにはっきりと意識されてきたので、イギリスのブルジョワジーがすでに数十年間も労働組合の指導者たちを買収してきたように、労働運動の上層を買収して、それを内部から堕落させることが、二〇世紀の労働運動にたいする全世界のブルジョワジー全体の政策」となった。「労働者に影響をおよぼすためには、ブルジョワ、社会主義者、社会民主主義者、国際主義者等々を装わなければならない。そうでなければ、影響をおよぼすことはできない」ということがブルジョワジーの外交術策となった。プロレタリアートがブルジョワジーと直接に協調しようと、あるいは労働運動内部のブルジョワジーの手先である日和見主義者を介して間接に協調しようと、それはブルジョワジーにとっては同じ意味しかもたないが、間接の協調のほうがブルジョワジーにとっては、いっそう有利である。なぜなら、それは、労働者にたいするいっそうゆるぎない影響を保証するからである。日和見主義とその完成形態で

ある社会排外主義は、まさにこのようなブルジョワジーの政治的要請が生み出したものである。日和見主義と社会排外主義との政治的内容の同一性を、レーニンはこう説明したのである。⁽²⁶⁾

つぎに社会排外主義の思想的内容について考察しよう。レーニンによれば、社会排外主義の基本思想は、日和見主義のそれと異なるものではなく、「ブルジョワジーとその対立者との同盟もしくは接近（ときには協定、ブロック、等々）」⁽²⁷⁾がそれにあたる。その内容をさらに詳細に述べれば、「諸階級の協力を擁護すること、社会主義革命の思想と革命的闘争方法を否認すること、ブルジョワ民族主義に迎合すること、民族または祖国の歴史的に一時的な限界をわすれること、ブルジョワ的合法性を物神化すること、『広範な住民大衆』（小ブルジョワジーと読め）を自分から突きはなすことをおそれて、階級的見地と階級闘争を放棄すること——これが……日和見主義の思想的基礎である。」⁽²⁸⁾この日和見主義の思想的内容を基盤に社会排外主義が発生した、とレーニンは主張する。「一九一四—一九一五年の戦争の情勢のもとでは、日和見主義はほかならぬ社会排外主義を生み出す。

日和見主義の主要な点は、階級協力の思想である。戦争は、この思想を最後までおしすすめ、……ばらばらになっている住民大衆を、特別の威嚇や暴力によってむりやりにブルジョワジーに協力させる。」⁽²⁹⁾みられるように、社会排外主義の政治的内容が日和見主義のその完成として把握されたように、ここにおいてもまた社会排外主義の思想的内容は日和見主義のその完成として把握されている。こうしてレーニンは、「社会排外主義と日和見主義との政治的内容は同一である。それは、階級協調であり、プロレタリアートの独裁の否認であり、革命的行動の放棄であり、ブルジョワ的合法性への拝跪、プロレタリアートにたいする不信、ブルジョワジーにたいする信頼である。政治的思想も同一である。戦術の政治的内容も同一である。社会排外主義は、ミルラン主義、ベレンシュタイン主義、イギリスの自由主義的労働者政治の継続であり、その完成であり、その総和、総決算、帰結である」と結論するのである。⁽³⁰⁾

つぎに、日和見主義的潮流と社会排外主義的潮流との関連について検討しよう。第一次大戦は、社会主義全体に深刻な危機を呼びおこし、戦争の提起した問題は社会

主義者を「国際主義者」と「社会排外主義者」とに大きく二分した。レーニンによれば、社会主義者のこの新しい区分は社会主義の潮流を革命的潮流と日和見主義的潮流とに分けた第二インタナショナル時代の区分に対応する。彼は、「国際主義者」を革命的潮流のうちに「社会排外主義者」を日和見主義的潮流のうちに位置づける。彼は、ヨーロッパ各国の社会主義運動の歴史を検討し、「ヨーロッパ社会主義の日和見主義的な一翼こそ社会主義を裏切り、排外主義へはしつたことをみとめないわけにはいかない」と結論する。⁽³¹⁾ たとえばイギリスにおける「国際主義」と「社会排外主義」との区分を彼はつぎのように把握する。イギリスにおける社会排外主義の社会的・政治的な意味での中核は、フェビアン派と労働党であり、独立労働党がこれらとブロックをむすんでいる。フェビアン派・労働党・独立労働党というこのブロックは日和見主義者のブロックである。これにたいして国際主義者は主としてイギリス社会党のうちに見いだされる(イギリス社会党の約七分の三と上記ブロック中の七分の一ならずが国際主義者⁽³²⁾)。このようにレーニンは、社会排外主義的潮流をさかのぼることによってもまた、そ

れが日和見主義的潮流と直結することを明らかにしたのである。

「社会排外主義はどこから出てきたのか？」という第一の問にたいして、レーニンは、これまで考察してきたように、社会排外主義の経済的内容、思想的・政治的内容および政治的潮流が、それぞれ日和見主義のそれと直結するということを論証し、社会排外主義がまさに日和見主義から生じたものであることを明らかにしたのである。この第一の問題が解決されれば、第二、第三の問題に解答を与えることはさほど困難ではなくなる。

第二の問題、すなわち、なにが社会排外主義に力をあたえたかという問題にたいしてレーニンは、「日和見主義者と排外主義者に巨大な力をあたえたものは、彼らとブルジョワジー、政府、参謀本部との同盟である⁽³³⁾」と解答する。レーニンによれば、日和見主義者の背後には大國のブルジョワジー、政府、参謀本部が立っており、彼らはその日和見主義者の政策を、ブルジョワ新聞を用いるなどのあらゆる手段で支持し、牢獄や銃殺までもふくめたあらゆる手段でその反対者の政策を阻止する。またこの日和見主義者は、ブルジョワジーにプロレタリアー

トの軍事計画全体をもらし、口さきでは社会主義と革命精神をとなえ、実際には、あらゆる重大な危機の瞬間にブルジョワジーに加担する⁽³⁴⁾。戦争のような危機の時期にはなおさらである。第一次大戦はまさにこの点を明らかにした。「日和見主義者が、危機にさいして……ブルジョワジーのがわに脱走し、社会主義を裏切り、労働者の大業に害毒をあたえ、破滅をもたらすということをし、戦争はまざまざとしめした。……日和見主義者は、プロレタリア革命のブルジョワ的な敵であり、平和な時代には労働者党の内部に巣くひ、そのブルジョワ的な活動をこっそりやっていると、危機の時代には、たちまち……統合されたブルジョワジー全体の公然たる同盟者になる。」⁽³⁵⁾こうしてレーニンは、「戦争は、日和見主義を社会排外主義に変え、日和見主義とブルジョワジーとの秘密の同盟を公然たる同盟に変えて、この発展を促進した⁽³⁶⁾」と結論する。

「なにが社会排外主義に力をあたえたか」という第二の問にたいする以上の考察を基礎に、われわれはつきに「社会排外主義とどうたたかうか」という第三の問とそれにたいするレーニンの解答を検討することができる。

レーニンによれば、「社会排外主義とは、ブルジョワ的腫物である日和見主義が、社会主義諸党の内部で、いままど、おりの存在をつづけられなくなったほどに成熟したものである。」⁽³⁷⁾あるいは、もうすこし詳しく述べれば、「社会排外主義とは、こういう日和見主義である。すなわち、比較的『平和な』資本主義の長い時代にいちじるしく成熟し、強くなり、恥知らずになり、思想的に政治的にいちじるしく明確なものとなり、ブルジョワジーと政府にいちじるしく密接に接近したので、社会民主主義的労働者党の内部に、そうした潮流を大目に見ることができないうちになつた、そういう日和見主義である。」⁽³⁸⁾第二インタナショナル時代の日和見主義は、革命的な労働者に迎合し、マルクス主義的な用語を模倣し、マルクス主義と異なる日和見主義独自の原則上の一線を画することをいっさい避けてきた。社会主義政党もまたこのような日和見主義が党内に存在することを大目にみてきた。だが、レーニンは、このような日和見主義と労働者政党との結びつきはもはや時代おくれになつた、と主張する。なるほど、小ブルジョワジーと隣接しているプロレタリアートが、小ブルジョワジーと一時的な同盟を結ばなけ

ればならないときもある。だが、しかし、「彼らとの統一、日和見主義者との統一を、いま擁護することができないものは、プロレタリアートの敵か：愚弄された者だけである。」⁽³⁹⁾なぜならば、自国のブルジョワジーとの公然たる同盟者となるほどまでに成熟した日和見主義と統一することは、プロレタリアートが自国のブルジョワジーに従属することであり、革命的な国際労働者階級が分裂することを意味するからである。レーニンによれば、日和見主義と労働運動との分裂は、いまや歴史的に熟し、また革命的闘争にとって不可欠の要件となった。「『平和な』資本主義から帝国主義へと方向転換するとともに、歴史がこのような分裂へと方向転換した」⁽⁴⁰⁾のである。

このような歴史認識を基礎に彼は、「社会主義の世界的发展の新しい時代が社会主義のまゝに提起している任務」をつぎのように規定する。「ヨーロッパの社会主義は、狭い民族的なわくでかざられた、比較的平和な段階から抜けだした。それは、一九一四—一九一五年の戦争とともに革命的行動の段階にはいった。そして、日和見主義と完全に手を切り、労働者党から日和見主義を駆逐する時機は、無条件に熟したのである。：労働者階級

の準備的な、合法的な組織、日和見主義のとりこになった組織から、：：：ブルジョワジー打倒のための闘争を開始するプロレタリアートの革命的な組織、合法性のわくを出ることができ、日和見主義的裏切りの危険から身をまもることのできる組織へと：：：前進しなければならぬ⁽⁴¹⁾。」このような認識のもとにレーニンは、戦時下の社会主義者の責務を規定するのであるが、これにかんしては、節を改めて、第4節で検討することにしよう。

B、社会排外主義の主要理論。レーニンは、論文「第二インタナショナルの崩壊」において、社会排外主義の主要な諸理論をとりあげ、それらにたいして批判をくわえているので、以下その批判を簡単に考察しておこう。

レーニンが批判する第一の理論は、「張本人」説という「もっとも幼稚な理論」である。「張本人」説とは、戦争にさいして攻撃をうけたからには、プロレタリアートの利益のために、平和の破壊者を撃退せねばならぬ、と主張する説である。これをレーニンは、その主張内容が経済史の事実と反すると批判する。彼によれば、「いま交戦中の両強国群の政策の主軸」が植民地の略取と競争者の駆逐にあることを、大戦前三〇年間の経済史と外

交史が反駁の余地なく証明しているのである。⁽⁴²⁾

レーニンが批判する第二の理論は、「だれでも、その祖国を擁護する権利があり、義務がある。真の国際主義とは、この権利を……すべての国の社会主義者にみとめることである」とするカウツキーの理論である。この議論の理論的前提には、戦争の開始とともに、諸国民間および諸階級間にこれまで歴史的につくりあげられてきた政治関係が、とつぜん中絶し、攻撃者と防禦者というまったく別の状態が出現するという見解が存在する。戦争を暴力的手段による政治の継続とみるレーニンは、この理論的前提そのものが正しくないと批判する。彼によれば、「戦争の客観的内容は、帝国主義の『政治の継続』、つまり『大国』の老衰したブルジョワジー（および彼らの政府）が他民族を略奪するという『政治の継続』」にすぎないのである。⁽⁴³⁾

レーニンが批判する社会排外主義の第三の理論は、社会主義は資本主義の発展に基礎をおくものであるから、自国の勝利は資本主義の発展と社会主義の到来を促進する、と主張する理論である。レーニンによれば、この理論は、革命性をぬきとった「マルクス主義」のヴェール

をかぶって自己の願望を伝導するブルジョワ的イデオロギーにすぎない。すなわち、この理論は、「階級闘争（プロレタリアートの独裁ぬきの）をも、『社会主義的理想』の『一般的承認』をも、『新制度』による資本主義の代置をもふくめて、自由主義的ブルジョワジーが受けいれることのできるいっさいのものをマルクス主義から取りいれ、『ただ』マルクス主義の精髓『だけ』を、すなわちその革命性『だけ』を投げすてる」理論である。それは、「マルクス主義の原則に公然とは反対しないで、それをみとめるふりをし、詭弁によってその内容を去勢し、マルクス主義をブルジョワジーにとって無害な『聖像』に変える」理論である。⁽⁴⁴⁾

第四は、カウツキーの超帝国主義論である。レーニンは、これを「もっとも洗練された、もっとも巧妙に科学性と国際性をよそおった社会排外主義の理論」だとし、その批判に最大の努力をはらっている。彼は、「超帝国主義」時代へ向うかもしれないとしてカウツキーが示した経済的諸指標を克明に吟味し、「各国の金融資本の相互の闘争にかわって、国際的に連合した金融資本による世界の共同搾取」が現われるかもしれないとするカウツ

キーの見解が経済的にまったく誤っていることを論証する。そして、「超帝国主義」論は、このような誤った見解を根拠にして、現に存在する危機と戦争の時期に、プロレタリアートの革命的任務を否定する役割を果たすものだ、と批判し、「この『理論』の帰着するところは、日和見主義者と公認の社会民主党がブルジョワジーに加担し……現在のあらしの時代に革命的な……戦術を放棄するのを、カウツキーが、資本主義の新しい、平和な時代への期待をもちだして、正当化しているということであり、しかもただそれだけである！」と結論する。⁽⁴⁵⁾ 次章で考察する『帝国主義論』は超帝国主義論批判の体系的結実でもあるので、この問題は次章で詳論しよう。

C、社会排外主義批判におけるイギリスの特殊性。以上われわれは、社会排外主義の主要な理論にたいするレーニンの批判を明らかにしてきたが、最後に、イギリスの社会排外主義を彼がどう評価したかという問題を考察しておこう。

レーニンによれば、イギリス社会の特殊性ほど社会排外主義の本質を明示するものはない。すなわち、広範な政治的自由、統治能力のあるブルジョワジーおよび明瞭

な階級関係が存在するイギリス社会には、いまだ強制的兵役義務がなく、したがって、ブルジョワジーの業務委員会である政府は、国民の戦争熱意をたかめ、志願兵を募るという目的のために、全努力をはらわなければならないのが現状である。だから、イギリス政府は、「組合に結集している少数の、もっともよい地位にある熟練労働者が、自由主義的な、すなわちブルジョワ的な政策がわにうつつたおかげで、プロレタリア大衆が完全に混乱させられ墮落させられるということがなかったなら、法律を根本的にやぶらないかぎり、この目的を達成することは絶対に不可能となる。」このようにレーニンは、イギリスにおいては社会排外主義者が社会の戦時体制化に不可欠の役割を果たしていると主張する。⁽⁴⁶⁾

彼によれば、イギリス社会の特殊性は、社会排外主義の本質を暴露するだけではない。それはまた、「社会排外主義との協調政策……の意義をわれわれが事実にもとづいて評価するのをたすける。」たとえば、「日和見主義と自由主義的労働者政治とは、『フェビアン協会』のうちにもっとも完成した形で現われている」のであるが、理論はさておいて、事実を比較してみれば、戦時における

ドイツ社会民主党の行動がフェビアン派の行動とまったく同じであり、両者がともに社会排外主義を擁護したことが、明瞭となるのである。⁽⁴⁷⁾レーニンは、また、イギリスの社会排外主義者P・ブラッチフォードの議論——社会主義はまだ全体として力が弱いから、平和の唯一の保障は政府の軍備増強を支持することだと主張する議論——を紹介し、この俗流排外主義者がカウツキーらの内証にしている論拠をむきだしにした点を、評価している。⁽⁴⁸⁾

以上の諸事例を検討したレーニンは、そこからつぎのような一般的結論を導出する。「抽象的な理論をきらい、自分の実用主義を誇りとするイギリス人は、しばしば政治問題をいっそう率直に提起し、それによって、他国の社会主義者があらゆる美辞麗句……のヴェールのした、かくされている実質的な内容を見いだすのをたすけてくれる。」このように「いっそう発展している国の諸関係を一瞥することは、教訓的である。ここでは、詭弁やマルクス主義の戯画でだまされるものは、だれもない。問題がいっそう率直に、いっそう正しく提起されているのである。われわれは、『先進的』なイギリス人からまなぶことにしよう。」「マルクス主義的な言葉は、現代で

は、マルクス主義の完全な放棄の覆いとなっている。マルクス主義者であるためには、第二インタナショナルの指導者たちの『マルクス主義的な偽善』を暴露し、社会主義のなかの二つの潮流を、おそれることなく注視し、この闘争の問題を、最後まで考えぬかなければならない。これが、マルクス主義的な言葉をつかわずに問題のマルクス主義的な本質をわれわれに示してくれるイギリスの諸関係から出てくる結論である。」レーニンは、社会排外主義批判に力めるイギリスの特殊性をこのように評価したのである。⁽⁴⁹⁾

4 戦時下における社会主義者の責務

「ツインメルヴァルト左派の決議草案」は、戦時下の社会主義者の責務について、つぎのように述べている。「戦争は革命的情勢をつくりだし、大衆のあいだに革命的気分と動揺を生みだし、いたるところでプロレタリアートの最良の部分のなかに、日和見主義が破滅的なものだという意識を呼びおこし、日和見主義との闘争をつよめている。」「帝国主義戦争は社会革命の時代をひらく。最近の時代のあらゆる客観的諸条件は、プロレタリアー

トの革命的大衆闘争を日程にのぼせている。社会主義者の責務は、労働者階級の合法的闘争のただ一つの手段をも放棄することなく、それらの手段のすべてをこの切実な、もつとも主要な任務に従属させ、労働者の革命的意識を発展させ、彼らを国際的な革命的闘争に結束させ、あらゆる革命的行動を支持し、おしすすめ、諸国民間の帝国主義戦争を、抑圧者にたいする被抑圧諸階級の内乱に……転化させるように努力することである。」

右の主張を要約すれば、戦争がつくりだした革命的情勢を基礎に、社会主義者は、戦争を内乱に転化せよ、ということになる。以下においてこの主張の内容を検討していくことにしよう。

レーニンによれば、革命は革命的情勢なしには不可能であるが、彼はその革命的情勢の徴候として、一、支配階級にとって、いままでどおりの形で、その支配を維持することが不可能なこと、二、被抑圧階級の欠乏と困窮が普通以上に激化すること、三、以上の諸原因によって大衆の活動性がいちじるしくたかまること、という三つの徴候をあげる。しかもなお、「すべての革命的情勢から革命がおこるとはかぎらず、以上に列挙した客観的交

化に主体的な変化がくわるばあい、すなわち、旧来の政府をうちくたく(またはゆるがす)にたたるほど強力な革命的大衆行動をおこなう革命的階級の能力がくわるような情勢からだけ、革命はおこる」と彼は述べる⁽⁵⁰⁾。このような革命論を基礎に、一九一五年のレーニンは、一、ヨーロッパの政治体制全体の動揺、二、大衆の災厄の激化、三、大衆の活動性の発展、という現状認識のもとに、ヨーロッパ諸国に革命的情勢が存在すると判断したのであつた⁽⁵¹⁾。

こうした革命的情勢のもとでの社会主義者の基本的任務は、レーニンによれば、革命的情勢が現存することを大衆に明らかにし、プロレタリアートの革命的自覚と革命的決意を呼びさまし、プロレタリアートをたすけて革命的行動にうつらせ、そのために革命的情勢に応じた組織をつくりだすことである⁽⁵²⁾。レーニンはこの組織の国際性を強調する。彼によれば、「国際的なマルクス主義的組織を実現するためにはまずさまざまの国に独立のマルクス主義党をつくりだす用意が必要である」⁽⁵³⁾が、しかしながら、その組織は「一国的なものにとどまってはならない」。「社会主義運動は祖国という古い枠のなかでは勝利

することができない。……『祖国擁護』ということをして偽善的に引合いにだして、労働者を離間し、分裂させようとする、こんにちのブルジョワジーの企てにたいして、自覚した労働者は、あらゆる民族のブルジョワジーの支配を打倒するための闘争のなかで、さまざまな民族の労働者の統一をうちたてる企てをなんども新たにくりかえすことによって、答えるであろう。⁽⁵⁴⁾このようにレーニンは、各国の独立の共産党を基礎組織とする労働者の国際的組織の結成を強調したのである。⁽⁵⁵⁾

この国際組織が、「いままでは労働運動の内部にあるブルジョワジーの組織的な道具になつてゐる」⁽⁵⁶⁾日和見主義・社会排外主義との完全な絶縁をまずなによりもその組織原則とするものであることは、もはや贅言を要しないであろう。レーニンによれば、「第二インタナショナルは……プロレタリア大衆をあらかじめ組織するための有用な準備活動で、自己の使命をはたした」のであるが、それをうけていまや「第三インタナショナルは……あらゆる国のブルジョワジーにたいして内乱をおこすために、プロレタリアートの勢力を組織するという任務に直面している」のである。⁽⁵⁷⁾

レーニンによれば、内乱は革命の戦時における形態にほかならない。「戦時における革命は内乱である」⁽⁵⁸⁾彼は、戦争を内乱へ導く活動方針をつぎのように規定する。一、排外主義とたたかい、軍事公債などへの投票を拒否する。二、国内平和を破棄する。三、ブルジョワジーがみずからつくった合法性を奪うときには、非合法組織を創設する。四、塹壕内の兵士の交歓を支持する。五、プロレタリアートのあらゆる種類の革命的大衆行動を支持する。

以上の五項目は、さらに、革命的大衆行動の支持と非合法組織の創設という二項目に集約される。⁽⁵⁹⁾レーニンによれば、戦争は、もつとも自由な国でさえ、ブルジョワジーが合法性をやぶつてゐること、また革命的な闘争手段を準備するための非合法組織をつくらずには、大衆を革命に導くことができないということを示した。その一例としてレーニンは、イギリスにおいてさえ徴兵反対を印刷物で呼びかけただけで社会主義者が監獄にぶちこまれているという事例をあげている。⁽⁶⁰⁾

こうして開戦後のレーニンは、日和見主義・社会排外主義と完全に絶縁する戦闘的な第三インタナショナルの組織化に彼の全努力をかたむける。そしてそのさい、イ

ギリス共産党の結成は、この国際組織の重要な一基礎組織として不可欠の要素をなすものと位置づけられた。第三インタナショナルとイギリス共産党の結成にレーニンがどのように努力したかという問題は、とくにロシア革命後のレーニンを考察する章で、検討することになる。しかし、その前に、われわれは、社会排外主義批判を檢討した本章にひきつづき、彼の「中央派」批判を檢討しなくてはならない。これが次章の主要な課題となる。

- (1) 「社会主義インタナショナルの現状と任務」、全・IXX・二二二ページ。
- (2) 「戦争とロシア社会民主党」、同上、一五ページ。
- (3) 「ヨーロッパ戦争と国際社会主義派」、同上、八ページ。
- (4) 「社会主義インタナショナルの現状と任務」、同上、二二二ページ。
- (5) 「ヨーロッパ合衆国のスローガンについて」、同上、三五一ページ。
- (6) 全・XXX・三〇八ページ。
- (7) 同上、三五〇—一ページ。
- (8) 「日和見主義と第二インタナショナルの崩壊」、同上、四五六ページ。
- (9) 「社会主義と戦争」、同上、三一〇ページ。
- (10) 「革命的プロレタリアートと民族自決権」、同上、四二二ページ。
- (11) 全・XXI・一七〇—二二ページ、参照。
- (12) 同上、二四一ページ、参照。
- (13) 同上、二四一—二二ページ。
- (14) 同上、二四四ページ。
- (15) 「社会主義と戦争」、同上、三一七ページ。
- (16) 「これからどうなる?(日和見主義と社会排外主義にたいする労働者党の任務について)」、同上、一〇〇ページ。「ロシア社会民主党在外支部会議」、同上、一五五ページ。「第二インタナショナルの崩壊」、同上、二五〇ページ。「フランスの「社会主義者の正直な声」、同上、三六六ページ、参照。
- (17) 「よその旗をかかえて」、同上、一四五ページ。
- (18) 「日和見主義と第二インタナショナルの崩壊」、同上、四五六ページ。
- (19) 同上ページ。
- (20) 同上ページ。
- (21) 「第二インタナショナルの崩壊」、同上、二五〇ページ。
- (22) 同上、二四二ページ。
- (23) 「社会主義と戦争」、同上、三一七ページ。
- (24) 同上、三一六ページ。
- (25) 「よその旗をかかえて」、同上、一四七ページ。

- (26) 「死んだ排外主義と生きている社会主義」、同上、八九ページ。「フランスの二社会主義者の正直な声」、同上、三六七ページ。「国際主義的言辭による社会排外主義的政
策の掩護」、同上、四四五ページ。「日和見主義と第二イン
タナショナルの崩壊」、同上、四五九ページ、参照。
- (27) 「よその旗をかかけて」、同上、一四七ページ。
- (28) 「社会主義インタナショナルの現状と任務」、同上、
二二二ページ。
- (29) 「第二インタナショナルの崩壊」、同上、二四二ペー
ジ。
- (30) 「日和見主義と第二インタナショナルの崩壊」、同上、
四五六―七ページ。
- (31) 「第二インタナショナルの崩壊」、同上、二四六ペー
ジ。
- (32) 同上、二四五ページ。「日和見主義と第二インタナシ
ョナルの崩壊」、同上、四五七ページ、参照。
- (33) 「第二インタナショナルの崩壊」、同上、二四六―七
ページ。
- (34) 同上、二四七―九ページ。
- (35) 「これからどうなる?」、同上、一〇一ページ。
- (36) 「社会主義と戦争」、同上、三二七ページ。
- (37) 「第二インタナショナルの崩壊」、同上、二四五ペー
ジ。
- (38) 同上、二四九―二五〇ページ。
- (39) 「これからどうなる?」、同上、一〇二ページ。
- (40) 「日和見主義と第二インタナショナルの崩壊」、同上、
四五八ページ。
- (41) 「第二インタナショナルの崩壊」、同上、二五〇―一
ページ。
- (42) 同上、二二二―三ページ、参照。
- (43) 同上、二一五―六ページおよび二三五ページ、参照。
- (44) 同上、二一八―九ページ、参照。
- (45) 同上、二一九―二二二ページ。
- (46) 「イギリス人の平和主義とイギリス人の理論ぎらい」、
同上、二六二ページ。
- (47) 同上、二六三ページ。
- (48) 同上、二六六―八ページ。
- (49) 同上ページ、参照。
- (50) 「第二インタナショナルの崩壊」、同上、二〇八―九
ページ。
- (51) 同上、二〇九―二一一ページ。
- (52) 同上、二一一ページ。
- (53) 「ロシア社会民主労働党と第三インタナショナル」、
同上、三三九ページ。
- (54) 「社会主義インタナショナルの現状と任務」、同上、
二五一―六ページ。
- (55) レーニンは、労働者の国際的連帯を主張するさいに、
とくに抑圧民族の労働者と被抑圧民族の労働者との連帯を

重要視する。なぜならば、彼によれば、諸民族を抑圧民族と被抑圧民族とに分けることは、「帝国主義の本質」をなすものであり、したがってまたこの区分は「帝国主義にたいする革命的闘争の見地からすればまさに本質的なものだ」からである(「革命的プロレタリアートと民族自決権」、同上、四二二ページ)。

(56) D・ヴァインコープへの手紙(一九一五年七月)、全・XXXX・二〇〇ページ。

(57) 「社会主義インタナショナルの現状と任務」、全・

XXX・二七—八ページ。

(58) 「帝国主義戦争における自国政府の敗北について」、同上、二七九ページ。

(59) 「社会主義インタナショナルの現状と任務」、同上、二六ページ。「日和見主義と第二インタナショナルの崩壊」、同上、四六五—六ページ、参照。

(60) 「社会主義と戦争」、同上、三三二—三三三ページ。

(一橋大学専任講師)